播州名跡志

三

和書門 類 九一七八號 一〇三函 九架 四冊

内閣文庫 和書 類 九一七八號 七五函 九架 四冊

内閣文庫		
番號	和 9178	
冊數	4 (3)	
函號	175	156

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印

図書局文庫

日本政府図書

内 一〇二五八號

印南郡名所旧跡 并 和歌 附 [呉]讃

高砂浦　同 明石　伊保之庄　高相生の浦とも云

万葉集
いつくにか舟人[行過カ]をしらし波路をは高砂の浦に波たちける

堀川百首
浦風にかはりし神もなれてよりたかさごの浦とさしたる其つなは　顕季

大臣のまつりかたにたえきれてひとつのふしをとめける

高砂の神の縁起に云へり　此所高砂の尾上といふ

高砂の松 中心枯て人をかすめけり之枯る所を以て焼は流
高砂のまつ朽し依て 霊元院法皇勅勘て高砂の松と云

当公左近の此時此所にて小松を植へしめ葉枝を整

ひろふ由来して今繁茂して太サ一丈八尺高サ一丈長
十二（本ノマヽ）七丈之岩根に神木を称し西世の枕
並上家か沙縁有をも申納し給ふ下霊之

以下数十首の歌読下し難きハ誤写ならん二三段めきさとせり
あれとも暫く原本に任せ

さゝへよし枝や老せぬ宰相いつまて千世の緑に神さひぬ。（脱字カ）

大宰師正仁親王

いつまてもうへ置たる世ゝに神忠心まてしてそ松枝

従一位通躬

神宮也の松ハとましての色もきて名高きかきり世に知る

権大納言惟通

正二位通躬

宇手毎をたる（本ノマヽ）川のなかれに匂ひもるゝさかへ宮ゐをあふく心を

権中納言運光

神垣に老木の松かみとりいく（とカ）十かへり緑そさくら蘇

権中納言有勝（本ノマヽ）

瑞垣ふるへても松のみとりもあまたもさかぬ神世もくれ

参議公長

一もとに気えぬ緑幾世よし神もさこそ見すむ万代まて

正三位通夏

此神の宮居さためる玉垣に植まつ松ほ松の本ならん（本ノマヽ）

右兵衛督為信（本ノマヽ）

ひろく出来して今に繁茂して大井一丈八尺高一丈長
十一丈二七丈之者根出神書を添して此世の有枕
堂上家者御縁所を古物しめて下安政霊書之
社頭松を名あれ古跡なし是

大宰帥正仁親王
さかへよし枝やさかえて宿るらん千代をかさねて世の海に神ぞさき

従一位通躬
いつまてもちきる千歳の世々に住吉の神もさかえて宿る松枝

権大納言惟通
神垣の松のとしをまた老せぬ色の名も高き世に

正二位通躬
幾年重なる川のその上に出むる八さかる宮のおもかけを

権中納言運光
神垣に老木の松のみとりいく十かへりも花のさくら森

権中納言有藤
瑞垣にうへをし松のむすひ結ひ出るや神世やしろ森

参議公長
一もとに栄えそ孫枝あるよし神もうれしむ葛籠まて

正三位通友
此神の宮居さためる秋まてに枝さし松の本茂る

右兵衛督公信

内 一〇二六八號

いつみ川る神の光のみは世をも照る松毎にしてかはらぬそし
従三位宣秀
時和る恵みも神のまゝに人しもしるき千歳のまゝ川
従三位為文
人々ところ志むつき千年をかけてまつる人に三河の神の紀伊の
左近中将雅孝
東しらたるま清くぞ志らる見る神のきる経を今と千里をかけし松
右近中将公福
うへときさくそきるぬるかの松は大江の世の緑毎にゆ世を
少納言總長

神のきみそれといつきるを名にしてきる人の本の末かさとなりき
少納言為範
こゝろ千世のむ神のみ年代松もかたきさとりてのそれも並び
右近中将季孝
清る方なみの神の末にさつてきあれて道の松の光まさる
右近中将公理
一しらそれみつるも嬢り神の末の末ぞ万世の末に清かる
右近中将実積
瑞穂の松をかけしきつくるまでと経ハ千年にさる
右兵衛佐資時

いつまでもみどりもふかき色そへていはひまつらむ神垣の松
かずかずに千とせをよはふ光をも名におふ神の宮の松がえ

菅原光榮

往昔
菅神西游所茇憩次宿之地其民必無不慕其德
而建祠以祀之矣播州曽祢村所祀乃其一也祠前
有蟠松傳言菅神所手栽也郷民至于今以為之井
棠尊敬不怠地勝也松靈也則擧世所偏知而未播
有紳歌仙之賦詠者蓋有之而或不傳耳祝氏村翁
以為一大父事常憂之僕亦竊仰威德者今聞之不

勝感情仍為賦蜂腰一首既又請竹園相府已下切
詠歌者十有九人之吟吟成而各自昏焉合為一巻
以附菅原孝繼良奉諸祠前恭惟以神德感震襟既
尚詠歌有幸經乙夜覧者焉僕亦之浴神沢栗淺今伏
願靈松之壽永興廟宇共及於無窮

特進通躬謹書

曽根菅神廟十二景詩并和歌

曽根靈松

大學寮藤原信篤題

曽聞北野長松茂　誰識靈松比地彰
前度無辜寸心赤　後凋有約四時蒼

清風同操孔明栢　恵化流誉召伯掌
壽色千年君子徳　神威為寵又為光
翼翼齊全　林愖士僖甫

日笠夕照

日笠雲収風力軽　晴湖涵影廻潮乎
夕陽雖好未明罷　唯表丹心一寸誠
退省寔　林忩士疆甫

洲中清泉

悲彼洲中泉水深　遺風千載寄清音
晴波一勺如明鏡　照破忠臣未死心
耐軒　田績

家嶌雲霞

為射為屋是神通　一遠望幾家万木中
分得雲霞三嶋色　一般却白一般紅
易俟奄　森哲

前嶋漁舟

波撼金華風景分　漁舟潟處代耕松
春潮帯雨海牛喘　罷釣皈来孤嶌雲
翠隂堂　田強

響灘晴嵐

灘上雲煙望不窮　多端詩料寸眸中
湖聲一道送残雨　天末青山千里風
渡辺　通叶

江南秋月

月照瑶宮仰徳輝　江南夜静気霏微
欲将清影比疎影　難奈梅花千里飛

時光魁鐘　讃陽文學菊池武雅

時光古利桂残陽　日日鐘聲報下堂
曽根松風吹不断　春容引響到昏黄

的形夜雨　東渓田子書

晴雨風寒不堪情　行基縁底托隹名
温泉濺沫知多少　変作瀟々一夜声

連浦皈帆　峴嶽羽儀父

晩風吹艇速於飛　四望金華帯夕暉
乍遠棹歌還乍近　波揺帆影衝潮皈

塩竈夜煙　桂山奥長

付鹵者潮傍海邊　砂汀月暗五更舩
風吹鹽竈夜欲曙　散作漁翁楚竹煙

北山暮雪　一色範通草

菅氏吟情鐘筆端　凛々嶺暗朔風寒
夜来子樹枯槎發　英做梅花落盡者

右十二景詩不限是而耳遠近之緇素文人之詠吟為数軸今撮其千一而記之也

同和歌

曽根霊松　姫路惣社官守　右近

引植しの根も久し神杉を[illegible]誰も傳へき

日笠夕照　泉州堺　西連

さしてしる人はなけれと天地に日笠の山そ夕てらして

〃湖中清泉　〃　大好

沖津洲志中に泉ハ流れても我か心えらぬはすかた

家島晴霞　松嵜氏　宗固

海原や霞も晴る日に見えて家島の海士の釣船

苅藻漁舟　本写山　一雨

いさりする名あるも海に浮かふ海士の釣舟

箕洲晴嵐

雲もなく織山あらし晴るて箕の舟なすを見る秋人

遠カトアルトナホ連ナルヘシ

江南秋月　三宅氏　長宣

入海も東の海に月清し江の秋の夜の月

駒形夜雨　丹羽　光辰

旅人をとゝめつけて夜の雨に宿りのかりに濡て行らん

晴光晩鐘　尾崎　文節

旅の世の晴るにたえず佛のみのりなれや

遠浦帰帆　河村氏

浦々にあやなき追風もとめかね梶枕さそふ

塩竈夜網　笠原　佐伯氏

浦なくて塩やく小家の中にて煙をあさみ網をとらす

吉根村　吉光

小嶺暮雪

梢のそらにふりし山をかけつゝみてみれハ吉野の冬の夕かせ

おく十二月の末のみなとに峯高き雪をかきなし

うす雪をつもらせて補之

同社頭松を詠せて　　竹本新　長徳

幾千世をかけて如色をみせて松の葉へと猶待之

岩藤　宗白之

こゑ世をも云ひころもの松の梢ひとつ松の今も栄て

素門　宗徳

松かくて猿なし八千世の御と松の葉へを添つへこそしる

小野　法橋幸世上

句袖せもしら紀婦にゝほふきそ千秀羅

二伊保藻　同　伊保海山　皆伊保々居也

誰もさくて摘ハられしき友千鳥伊保の藻を隠てこそなり

名所

藻塩焼ハ浦の浜私舟掲て波路をも世にそ見けれ

登蓮法師

同

志ゝ海浦に鴎のき春しも留め遠伊保の藻に乱れる焼

同

ゑりも一海に摘の出しきハいて出なりてさかへなる

新続古今集

大江千言

深き花よ嵐ぞて出にあり雨灘いての藻よ千鳥啼なり

わかのうらハ塩やくさとしあまのとも伊保の浦の秋の夜の月　後鳥羽院

伊保の浦ハ宮城郡にて多賀城小富郷也

一 多根の塩燒

天満宮 社家一西の塩濱にて南海ちかく詠によりて
修（巻ヵ）業をかさねてしか〳〵し寔に融の大臣塩竈の子
賀の塩竈の海を都の内にうつし荘園（蘭）の景（こと）とし
事となし至りてすゝミや後人も此地にしたひ来つく
貝利にハかくて人あれともいひなす人ぞ
わうれなまよみ詩（詩ヵ）法にし人の庭をいかるハさる也

そのより西の山も大きに越て大塩村的形（形）村之地図書
陳の塩濱の錦（餝ヵ）東郡まてを一西の塩濱にて橋也
一 此郷金谷の名有之
△荒井　同浦山
大塩約（的ヵ）形の邑の浦を荒井の浦とも云
西濱村に荒井とて有　読人しらず
立よりて影を（本ノママ）ちらす荒井にハ誰か名寄けん立ちさき
ちきりなき荒の地の浪とともにて今かよひ来ぬ秋の夜の月
△塩竈浦　大塩石　西行
山家集
さくらひくあ（あヵ）まのつりけるハよそにてもあはれなりけりちかの塩竈の浦

△塩屋浦　日本紀云　伊勢

しほやの浦をよめるにもあまた歌ありし人のうへを我かなしふ

一的形　古書ニ的潟、准ニ皇大神宮儀式帳ノ的潟ノ所加ヘし
伊勢國的形保田、名見風土記ニ、雖ドアリ

詠めや家づとにつましへの浦をは決此同出るよせつゝ是をは

一的形原

今は的形といへる所は浦の様の干潟のあなたに見ゆ

△黒岩

黒瀬村より海辺へ出る岩也　此岩之上より見れば

祥しあらし之　詠と云別干之ほの仏岩は自然にて

一玉垣　此川浦　詩歌多くし東浦とは黒岩也

万葉集

なつ〻きいなみの海の松か根に波こゆる沖津風吹けり

千載集

こゝのうらにいりあひのかねおきつなみいなみの海の暮ぞかなしき

△塩屋浦

塩川与肩の領の中に大塩屋あり此せとの吹

ものかたりにくるゝ浪こゝにいへる

詠よ又一説に大淀を詠めるとせるは大これ

の方あかしや此名をといへるべし

一吹越の浦　的形爲ヲ云カ　名不詳、的形ノ風景ヲ云、風波ノ江ニ不シト載ス、風早ハ妻麻究無ニ沖之

夫木集

吹越の浜の汐風身に入て御みの沖ゆかりなり

一田中　此里　的形の内ト云郷也又不知明之

稲妻の光見えつゝやなきさ海之田中の里の夕霧の夜

一石塩の民業塩焼也 浜籾子新焼出ス處の塩
一田の中にくをさや西宮東宮庄大坂までも
此所の塩のいろよぬ隠なし 此所にも若狭まで
らしいつの比よりつらにさる人ありし 菅若松のは
家臣也へし 此所の東にあり 伊勢か居と云所
肯古へ伊勢ノ社ナリ（本ノマヽ） 此所の神いまもあり此の宮ハ
伊ノ文此村ニ見立の若松の氏 八幡大神 此浦と
云ともやかて御寄る古田氏ハ御四郎太夫と云者と
此井にとらへ御かけと云伝ふる也

一天治年中南州城山ニ於テ尼の時宗勝無法ノ士ヲ集メ
籾千ノ駒馬ヲ揃ヘ市番所ニ又前栂ノ軍場ト見シトテ名軍術ヲ
馬ヲ試ミ磨クト云 此籾千ノ的ヲ立テ不寺七トカタト号スト
云　三木家記ニ出

一福泊
此浦ハ神后当所ニ船ヲ泊メ給ヒ此時大風降りゐ
西之そしさ海の中に勅之ありしより 晴雲ノ寺ト云
海雲院
西之寺し晴る日のにぎはひも末の世（本ノマヽ）のみとみしとのちまで
妻康貞祐

古へ有漣非しても残渚とひかし前も名ハれ来の且ハの志可や

一水府　福泊ノ下　　後拾遺集

家集
東しりうちとことひ出れハ水府のいろめの私の袖とやはうし

一風波ノ岩

考ニ云風波ノ岩目端ニ見ヘス風波ノ沖カ的形ノ保風早

日本カ皇后麻生より御門出ノ時御祈風早ノ吹立

群卒検船十三又ハ説言麻究毛ノ沖之ト云ニ依テ彼

沖も日本ヨリ出ス伝ア是ナラン

一晴ノ沖

神功御ト松ノ内より雨三ハ已ハ止云トテ勅シテより名ク的

形ノ西ト申御ふ福泊ノ北ト申ス港よりハりてノ里ノ旧

名ハ已アるノ里とも号ス

一楯岩　的形ノ保福泊山

神后皇后ノ御識楯岩ハ瀬子川　瀬子川ハ妻麻瀬川ナルへし　と里射立ク候より

又大田ノ今楯岩と云大田某城山ノ名也

又云浦大脇説蒼ノ代々宴ニ瑞兵ス比見

一武澳ニ小路有菌宮と云又菊宮中山とも云何しも

より見ても菊ニ見ゆる石菊宮と云借谷にてもかの山

とも云ふは牛か御する形ニ見ゆる石牛宮とも云西

又まい路の形毛ニ變して見ゆるニ依て化山とも云

往古ハ此地方より三里斗沖之飛丸ニ近ク
見ゆる松木ハ今も草茅ノ中ニ斗生ケり

嚢錦氏 書市南島とこそ云

一色山崎村ハ堤際十一ケ所清水湧ノ中にして此清水
まゐり昔某公此地ニ御舟をとゞめられし所ありとて名
求めある人ハ自然と湧出しける由一丈四方斗清くして
東隣之村より見へきと茶の水ニ汲用ゐ湧く場すなり
此のハ却て水性悪敷加茂尾張清水に従ひ
梅丹と名年不之事ノ清水之 委ハ当村天神之記ニ見へタり

道雲

いはとてもかりそめなる人のためしと見る夜の月

一米田村米塚

昔天化初の年箱舩が流れ化と云 舩師東海を越て
官家の年貢米を積て運送に流道仙人は当山ニ飛降
神術を以テ舩を止め米を見める八所此の米俵を
りとて投られし辺より海ニ投て舩中の
俵尾の飛ゆく所ニ流れ法華山へ来る
依て此急通渡海の所と云 舩人終夜にて流道ニ梅
隣ミを先ツ道筋て帰りぬ 今ニ此米俵落ちし所
ヲ名付 米堕田 と云 今堕の字ヲ略して米田

村と云は法花山縁起に有 今氏神天神之森の端に
米塚と云ありし
一 龍(メツ)カ山
米田村より五六町西に当て山有 二三葉ハ村并塩市
村と云 往昔此所まで海にて流れ着て 船人此所に
着岸(次カ)其節に埋む 人家出来 此龍山より当地年中
掘出す 石二有て石を切出し運送す 農人出家
業として 此龍山(カカ)の麓に住居 妻山より(法カ)道の投(投カ)あり
流の落たる所にて 小高き塚有是を流塚と云 妻ハ之亭(亭カ)
粗書に有
又此山の麓に 川中へ投出したる大きな岩有是を
別龍岩と号ス 形チ(チカ)龍ノ頭を差出したるがごとく 松生(生カ)はへ
或云之 又龍が鼻とも 此所に云り
△加古当 渡(渡カ驛)駅川 法 浦縁
風土記ニ 香費ト有 後ニ鹿児之川ト 書改
夫木集
和歌多り見へたり
神吉治年
宗
鹿児之川
為家
夫木
旅人の袖打濡れ 我もあふ 毎に 来る加こ川なる
新続古今
賀古湊
津守国量
ささ浪の寄るかこの湊の 名に松原として 千鳥鳴なり

一書に垂仁天皇十三年清路にみゆきして猟
し給ふ時天(天カ)皇西の方を見給ひしかはるかに杉千
代丈廣き山にて稲日廣野の氷門(ナト)に入西
天皇使を遣はして之を尋ねさせ給ふに人角比年
ふる廣の(皮)彦と云へる者あり勅使問(向カ)ふに云くこれ
る人答(答)て曰日向国諸縣君牛と申す者年老
て仕へを止むと云ふ九帝を慕ふて己(己カ)
娘(娘)髪長(ナカヒメ)媛を奉りしを
天皇悦ひ之を召給ひて媛を傳ふる其道の夫なり
此氷門を廣野のなれとも此氷道とは又廣野と

いつより見(み見)よりて之は今の加古川渡也湊より有るなる之
△加古渡　　　　前大納言
夫木
松風はさえてもなほ之は稲ノ渡のうちよせむまては書へて
△加古渡
湊原をさえてもなほ之深き(脱字アルカ)浪(やまえ)霧(霧)深き(深え)ぬらして
△かこの渡(渡)　　　　隆季
夫木
わかれてかこの渡(渡)の引(引え)川綱のうちはへ君を待わたるかな

晩過加古川　　　　長濱氏
十里平川泣(泣カ)水舩　山巓映(映)水翠微連
江頭集(集カ)晩行人絶　只看群鳴(鷗カ)聚岸辺

賡韻長濱雅見過加古川之瑶篇　山脇益洲

呼喚声喧加古舩　行人征馬渡頭連
鉾陽水面遠山動　松樹影沉魚躍邉

合次韻　何某氏

驛馬飛空嘶（嘶カ）渡舩　西東欲急（急カ）暮（暮カ）雲連
倦行白首相知否　加右（古カ）鐘声落漠邉

一元禄十六年癸未八月大雨降つゞき加古川筋
丹波奥より洪水起て流溢し堤切在々不残江溢
家流レ人死之牛馬ハ没死するもの夥し此故人
嘆（嘆カ）之有長篇賦吾メ以慰後死

洪水歎

鴻水鴻水歎未欲　讓揮毛毫写三篇
元禄二八癸未歳　仲秋三六辛卯天
天地漠々霾（霾カ）雲起　乾坤殷（殷カ）々雷霆旋
源渇丹州氷上澳　流渇播湯（陽カ）鹿児川
懐多可賀東嶺疑　宍賀古印南市鄽
日圍岸崩高破浦　浮橋塘潰生石前
宇宙寓目最洪廣　縦横回首暗黄玄
山林怒號魍魎馭　江河鳴動蝈蛃怡
池煙成沢坡堀洫　家溶知桴賊漂筌

奐鷩龍蛇飛蟠陸（陸カ）　牛馬鶏大（犬カ）没躍渕
幼弱溺死難勝計　壮夫游泳楢堪憐
載親負子造凌殆　摧骨（骨）傷身倶得金（全ル）
昨見花実満熟畠　今作砂礫荒癈（廢カ）田
稲萩蕎棉尋無處　服（飲カ）食水火求不使
餔糟舐糠絶（絶ル）支腹　歓膽坑霤暫濕咽
三日躊躇混沢沼　五夜瓢泊宿漪（漪）漣
雨断凨定水既落　月明日照土復堅
近憐（隣カ）相逢悲感（感カ）額　遠境訪来愁摩顛
拾搓聚藻假構屋　綴檐補壜（墻カ）漸設筵

朝望蕪苑聾口哭　尊（亭カ）倚破（破カ）窓曲肱眠
國君者（肖ル）賊救窮困　郡司領鐘揚炊煙
藜民嘆世意甚惓　老翁感時語更賢
人間萬事雖轉倒　天道五行正依然
火能膽竈又燔竈　水能泛船亦覆船
嗚呼時哉将變矣　莫怨天乞地自𢙣（懲ル）
他本
一かな川於宿（宿カ）ハ西（西）国街道の駅路之西国諸侯の旅（旅カ）宿
一本陣　かな川ハ宿ノ東ヨリ高嶋町ト云　かな川郡辺　中若与
三度つゞけかな川と云ハ又河まて　此上ハ丹波より落流

迄ハ東加古郡 郡北加古の流にて 下ハ加古郡 加古郡賀古の
の浦へ七里 此里を漂ひて海に入
浦と二里 帯ふ川 舟上下して米穀炭薪等を下し銭を
納て下し 塩干鰯等を積て 中ゟ上下す 曳舟をもて
川大名落の舟也 此川ハ近西国一ノ大河也 川ニよ
て東付崎村ニ而は 世印南野ノ内ニ而明石郡ほか
り加古川ゟ広野也と云 是ニ依て 此世人家多
東よりゟ 野口ゟ出 灘ノ口ゟ云 加古郡ノ内也
名寄 和云 万葉集 神亀三年丙寅秋九月幸播磨国
印南野時 御赤人詠 山部赤人 天平ノ比の人也 従駕図史ニ云

神亀三年丙寅九月造頓宮並装束司為将軍幸
播磨印南野之 冬十月辛亥行幸播磨国印南野
甲寅至印南野邑美頓宮 辛酉従駕人及播磨郡司百
姓等供奉行在所者授位賜禄有差 之ハ加古
川ノ東ゟ明石郡一跡ハ広大ナル野原ハ帝王臨
幸ありし所也と云 印南野の内ハ明石郡ニも見えたり
此加古川と云ハ 法華山の近辺ハ一面
の大河にて 西ハ今船町村並田新村など云在
所ゟ東ノ川中ニ流れて 法東の海へ 二流
申ても 流難 加古川ハ 万治元年の洪

国主より大堤を築かせられしに今も大堤是
之元を蒼田堤といふ古人涼及の大蓍信なり主節
菅信の作たりし新作謌相詞所に載之一段
一此書万治元年仲冬秋加茂川滝の向より東へ
蒼田へ十七橋より西へ米田村迄大堤を築き此
赤の便能此ノ傭人の難きを除かし蒼田堤といふ由縁
をも物称ニ作りて謹へ柳桂剔か南所廉迄川と申
ハ私ノ上冊淀津ノ明也山城都にて早宮の名にて称ス
深迄其て蒼年にも合す源りき侍姓諸侍姓拜出ニ
神出所云々時高矢原ニ廣メて此秋津側を称へし

て滄溟（滄溟カ）よ由来もよて此段詩を投下させ津橋乃東
詰り居の山にも所の下蔵居之ひ□□つまりて波
高須や虎鐵西出一七尺甬よいつの沢より
か蒼田にも所り二条と成り平津杉元川西村廉迄
川ノ十町斗がこそあるよ涼二ツ有大風大雨降る時
還雑鮮はるのこち神出小ノ方逢乾を渦り大墜乾ノ方村也神
爪西ノ方ノ村生洛ハ下の宝敷山を川石宝宝敷有縁る金瀬等
相の松の枝の橋もありは歳麿が果を泊ふ混乱させ
きつれ氏延見輝か那る附の湍雪讃神ハ木原何集
又以て梯原所存之棒忠烈公ノ御作之滄寺本ニ端中もしハ気郭の路道迄

中りよ帝王のなる道徳あれハ明君よりも出来るに代
るならハ京處之川ハ三道者え守つては西国より
大小名をはしめて往来の旅人までも天下の江
用悉ゆ此日川の外なるに在りとも又有之二
里の淀より南にて京の西田の前をも秘えの西川様よ
古堤を築落一面よ植えをも萬世の恩功を示
らん扨又此西岸の小水下数多の村々ハ田畠植も
堀堤も人家残宅流亡し無分出の様々にいつも
難散の人々二ツ三ツ又ハ西田と河原より来臨の作
に応じ新田新畠開発の農民耕作に励み候必敵

其饒のもといならん爾しあれハ御仁徳洪恩の余沢中
一日も忘るゝを得て悪し人をもなくして扨をそれまして
しらぬ者にて申し上る申しの道ハ古今難有き御智謀にて御定
相勤ましく候上ハ候へ対して此恩徳西も下万民安堵致し
る也之御変天下泰平に治る御代の御仁徳也何ぞハ是
に勝る人ぞ。せん者くにてハなき事に候思ひ侍之
し此度中にて御前をと立出し候ハ萬縁之年代成の
古国より御座有中に御評定其も示し大成之三ヶ縁下
へ願をいれ之ほとの年余村々小石や年寄前々高
にて遊ふて人足割付紀七月十六日よりに言る旅よ成道

八七ツ過頃より此所にて古今未聞の御難儀笠原浮田
之出たる粮もなく小米豆麦稲大唐の種も蒔焼
未た遊業も等しき衣服夜分にて着る物なきの如く集
込大小洞も河原にも牛馬の首を流れ寺堂一ヶ所
此類もなく是より日村村地内まて十二ヶ所余町
大事の場所をも残らず押流し洪水に相成
其後四八月高水之高三丈に及ふ滝嶋は八百之川の
水際石垣も牛蒡蛇籠の類押崩し山土も崩れ裏
表流れ其土生籠其外生茂り八千代動く山中
小組に流れて山流川色八反田沢鍍畑組類

生類雅彩海組にて棲めり来る所未曾有之珍事
組に流れて残る八月上旬頃は幾日を積重ね二十日余
霖雨雷電し車軸の如く雨降りて洪水濁水
余所の益田の大堤一ヶ所の内洪水流れ河原を越し
見る者皆相流れ人肝を消して近所の者
に於て親類人丈を頼みて方々と避難して拾
ひ集め候城下へ逃来る所流れに抱かれ
行中流流の如く又大河に流れ行く其を堀割
中半町ヶ所にて家々流れ中々の所
皆只悲しく御座候其類多く御座候難有

なしと云ふてそこに上氏又川東の瀬にハ大地
中津河原村より古昔の川筋にて水損両ともはなはだし
然るに西ハ徐々に御取は堤防にてハ唯当旦此類亥る
も東平に切換しる家所かち川分にも所々川一
流れ入し此度の御普請を五六分程になし置る
向後毎年の春秋に東方共に取しつゝ出来ゑ築出る
上に続きを年々積重ね迄ハ層を重ねて山をなし此を
西流切激しめつる如大河とぬりても川除大破し
患なく上下廿中へし此埋比難打捨共鍬共郡を置
て見ざる上より此伴にハ就しも一理の中方

其至極に之ても自業の難ハ後世の池成の程
の古来云ひ立懸念頻りに困窮し気の毒を見ず
丸顧ミも未だ其足積もりに皆迄の人足ハ漕ぎ積
てたらすこれハ宮字の掛西左段東のに高なり村数
五萬十ヶ村より六千の前負ひに出来ても足懸に及
ぶ者はこれを追放との評定ありてハ皆ハ見すれ
きゝ文を申立て見逃すともあハれなる鳴呼
斯くのみ御普請に秋の天宮を初め川や節季村
々も壹里八十の宮橋とも繕流して業の様の安
不と喚きと右河原東河新村を相談郡番

落て平ニ津ニ令し水ろ然為ノ波測て流れけれハ
米田を営ニ渡世て辛艱ニ業を営村や郷も記且
該が當分月の如ニ谷を流し借銀の側定関ニつて
い法深術の方つ手を新出り新を理空之借金積
増ニ行ぬれニ役人不を粉益因年概ニ似つるも
穿擢と枝梳鑿ニ連綿や坤前さまてれニ寺掛ま陰
魄有錦ら延之路ニ河原ゟして討しも絶入目暈を
呼もつりり何を足る東常りて不绝の枕ゆへ沈や癒
氣の持病出て次ニ山ぬ病人ハ日途を府ひ人代立
ころ出役を仕舞けり一時落や臆病を拵出金

ろも粉きつハ此仍病體ニ乏てつ得けり済ぇ町坊所
ニ至れハ机所派て此福善ニ如ふ鋼弥寺ニ御手ニ於流
不然川も廿手〃首り二千日も足裏所営の尾めも
坑所撰如能体つりけり脇ゟ於そ式ニ然積まて
入ゟ十二万箇ニ三百石ゟ八人掛一日一箇二千之
西ニ所尊債五千日人粉谷て六千箇四十八箇を一
人ニ一錆出合辛均よして七千二百石ニ余ニ示
役人附ニ所僕ニ山方迄壹所所一万石ハ入とりや
茶艱一人三足之つて三銭價所ハ銀目々引ナて九拾
四目之夫ニ茶煙草上戸ハ酒味噌塩せ薪の入用ハ前

ほりたる事貴之能志屋橋〔棧〕娘好清波塚底之白
夫合比傍也とされ季信もし月もし解おほし橋〔橋〕
けむハなれ共大手小坂にて新たに往迎の屋橋之
実かも知らて二葉に行きとゆめ清野に通ひ強
まくねとも此よりのいにたれ共にとひて此事
わ計るの西の年に齢命並仍先境にてもちえ記し
去るに秋安ハ民をと拡き野中を見飢ゑ里て訪ねそ
此り〳〵（本ノマヽ）

一 古騎塚　ハ於久村近辺

加古川の〳〵西浦の西岸にて畑中にあり〳〵云々

塩谷村皮ある貝高砂よて然ひ浦の盛此の中にて
追撫に鋲り右貝の妻の代にも緒を寺記にて其近し　太宰記に見へたり

一 八十の岩橋　平八荘 出並苗村

佐普保崎治保崎耕此山の古渡屋の由棟今山峯也
自然と石橋有　年ノ方池の庭村の西へ半町計西外田村
の方半町計東迄り年寺記神代村也文播磨風土記に八
十橋有てより八十二神降臨の由を記せり風土記
に於加古郡益気里に橋有て紀の事を話せ（本ノマヽ）印南
郡益田村に有之岩山を自然として石
階有今に伝へて八十の岩橋と云説に符合すれ

四説之

御代ニ成行まゝに風音すゝしく見ゆる清く八十氏詣　　男も詣師　恵慶法師

霜ニ成ハ八十氏人の群集に露る風さゝへ渡る八十氏人も　荒大駒ニ　驪駒

文一説ニ村雨名倉大己貴命ト申神をも奉れ渡る

たらちねとも云　　風土記ニ見へタリ

一　八十川原　　外田村ノ八新川ヲ云　是加茂川ノ川筋ナリ　　浦上村家

筏ちれ行つらゝる世の中ハたきのぼるさゝ八十氏川ヲ

八十岩橋出云記

八十の岩ねしハ橋戸ニ有事歟並筆の何ニあり
てハ外田といふ此山の風土を記するに伊ぎ
なぎ流と成筈八千二命と申して降り
給ふ給ふにハいつれ八千岩橋にて云又此山あの
法ハ蜂峰をして奥つる石階有図て中とも
いつれしと名残りとす留るよふ伴者二程
の所御此ハ降りみ国をいでさせまつりて成
浮橋をもいふと萬侯神代巻抄にて浮橋ハ舟
浮ニて成橋事て橋戸ニハ八十岩橋と記すり天降
橋とハ出天地陰陽出る画を結ひして　かつてもよふ

いとはさゝなみと表して いつもや 柳は岩ほに山
の姿にしてあまり西南に向ひの方二十丁余ニ
して石山を流して勢多に湖水の鳥ハ川を
浮べて又船にて心を蓬瀛にあそばせて雲をも
くだくすべしとして摩耶山の峰にて秋の月のくまなき
に観じなどにて波を遠くわたる見れバ也 かもめ
あらき湖水の晴嵐に人の木の葉を 空に掃ふ風
し高や高砂の真帆ハ一隊を情ある尾上の松原の
粉の面にハ凡人の跳を出して やりて海 松
にも堅田の浮ぶハ折ふし落雁を飛し遅ればせを告る

なり彼後九條内府も宮に仰つたひの比の雲に
あまりし高砂の松に粛き様の浦路には松に吹嵐
の声を高砂の浦路をまさり 秋の夕暮に吹した
まさき松浦の夕照に基本源氏を作り始めし工人
石を実にて代木下ろしに来るまに一て山ニ見ぞかさね
に高橋のらく落葉にて山ハ讃もくる秋の十五夜にて
を神して一條の古法に黄維の花を思ひ出
咲く種ハかすみ杉河原に紅にも雲脚に後はれ旅人
の足をもめでてや御しそ笹笠ハ山に通ひ姫
くしに返る河船ハ内境を横に粉虹を落じ

詠もかくやと川のなかに衛士が焚く火の上の、いさり火も
余念なく静つゝみゐの淀火ならべ神信の清き
を信ぜ人あるべからず。へまは穀もの祈を捧げ
をいとひて世のあらましをわするゝ人大神に
里見の社海を見わたして清くして明石の浦大かた
き神無山は寺に入りきよし文化のて小名ある
稗の所天下泰平武士の里には大名并に古跡を詣へ
うるれと見に婦人耳にやすして神縁ありけり
するに有もよりて神代を西にしておもひて豪華
の社の堂を拝し心の水を清めて浮世をたのしむ

きこえと共に出るやとすゝみなほ時にうつりぬ八京
十二京の姫なる所はこゝにありける人のなかめる
方へし室町代をのこす京勝は寺亜桐枝鶏ん
貴婦人は天の羽衣の妙に風すゝしくつる八十の岩もし
に縁ありて、いとまきうしと名は浦乳ぞ處そ
し南をと続きし京の世きたる處の穴、記して是をあ
らんまは積年の人兵楽音懐旧の思ひよせて補
記もなくもあらしとてこゝに祝ふよといふなる名ま
卅年延享三のとし名山旅中漂のありしを記して
千子振神代の事にて記すや草庵唐の八十の翁

姫府惣社神官　浅川遠江守源慶敏

一天下原　村名　弁田村ノ西三十斗丁　神吉村より二十斗丁
東ニアリ此所ハ古ヘ天人降リテ羽衣をかけし
所村名トス　天平勝宝六年二月ノ事也　清和神紀ニ見タリ

高倉道延

播ノ小社考
あまくだりて衣をかけし所とて天下りける人をもゆかしき

又曰毘沙門天降リ玉フ故村名トスト云　古記ノ説ニ見エ

一神木庄　幣ノ庄　両庄由縁
日向大明神垂跡年中大ナル石ノ舟京加古浜ニ遷
シ玉フ時榊ハ今ノヤシキノ地ニトヽマリ幣ハ今ノ一ノ庄ニトヽマルニ
ヨリテ両庄ノ号トス　考ニ神木村名ニ又庄ヲ神木ト云幣ヲ
里人平ノ庄ト書アヤマルニや　神木ハ神ノ御位大己貴命ノ御返事
ノ御時神ノ幣也リシト云

一幣之里　今幣ノ庄ニ里村ト云在所在　神吉　金輪

播ノ名所集
古へよりまつる月村に八千戸の神の幣とや言ふと聞る

一神吉村　神吉民部少輔ノ地也　天正年中落城
此所ハ神の御位の御神とそきこしく済龍所
欽明天皇十年三月云ヨリ神吉ト云同也ニ宮有　古記神日記ニ
見ヘタリ

今真名井清水

是を神谷の古名石井と号　今中西村ノ下田畠の内ニ有　ヨリ西之方ニ在ル之

摂州古本集
神さふく幸咲風に小舟てもそよきこゆる石井ニ残るを

△都賀志井　堺ノ石井ノ呂村ニ有

元明天皇の御宇和銅年中堺ノ古名を改め（ツゝ）

汲清水も流出すと云しを今ハ又石呂村と云

清水の名に寄　井ノ口村と云　元明御製

あいよみあふ井のくみ清く流れて世々絶さる泉と澄（み）し

此清御製ニ依て都賀（涂）の号有州村名とせし

△唐泊　今ノ唐乃末村ハ志方庄之

一大釜　志方庄 大西村　前ハ大木ノ里と云

神后麻生山御座の時将兵の士卒糧食の釜を立

し所也　又一説ニ満仲公ノ時西国下向ノ時大釜を

多ク集しむると云　又一説ニ嘉吉年中木ノ山籠城ノ時

小寺家ニ属ス兵ヲ為メ大釜を集しと云

右何レカ是ナランニ真偽不分明　然共　神后説是ナラン

カ古キヲ以テ　庸とき之

一佐土村　同志村ノ東　東野東郡南東郡の境ナリ

往古国棟梁乃御門　神功皇后の時都御領在の地と

云須頃抄ニ佐定の何之西浩接ち凡何と申也

一佐土ト大塩の境ニ書山と云　川有石原也ト田地

小ちよ姫喜ふ娘も悦ノ所ハ此城主大塩氏下嫁ス故
小ちよ姫住地なり迄も是を田ニして大将をせしも
一　楠居山（クスヘ）　依テ地門小山佐土新村ノ小山嶺岸之上此山ニテ　嶮難ノ山ニ岩山アリ
此山ニテ古ヘ宮本武蔵天狗ニ兵法を習ひ紀し云
武将感状記ニ宮本武蔵ハ播州（ホリマ）東郡宮本村ノ産ナリ十九歳
幸武蔵ハ二刀ヲ好ム細川越中守忠利公ニ仕ヘ五千
石ヲ賜テ家臣ト成、其前兵法修行ニて下巡見
せし人之又播州武蔵と云明石ニテ兵法等有し云
一　小谷村ノ南一丈計も高き石ち碑アリ　此辺（南側之）此所を塚云
信者国分寺四十九所の内此所之七ツ番目の旅宛

此辺有近代所々方ノ隅より大石出し鐘撞堂跡
ありしといふ
同所堀ノ小刈（遺ル小駒ヶ寺ノ側之）小六（ホノヽ）続武者と云塚有其後三
年備後三郎高徳ハ官軍に属すと云義兵を運ふして
彼所まて行幸の一枚に七十大名和田松崎なりと
始として七十七騎兵穂部那波の浦まて并びに従ひ
家々を那波の備前宇佐美浄三郎在家ノ討平氏子ノ
其手勢五十騎計すて路を急き来て追かけ来ル六
保々此所にて追手兵衆七十七騎の者も大方討死
唯六騎と成此者今ハ道通りしとも阿弥陀

阿治隠岩ハ阿弥陀岩の誤りや

加古の辻堂に鐵也經切て入れるとぞ此所は総社　六

中ニ倚家也と云ハ三使ノ親也　戸沢ホノへ　行平之エ　新大口

三位入道ハ左安記二十巻後モテ村ノ雄ハ文倚須也花長

阿治隠岩ニテ自害シタルト云所り给ラセニナラン

今此塚ハ石佛一所　松本一本有之を六條武者と

云低人倚塚し宝篋佛と云今ハ小礫斗也を思はる

友達速日士何事もなき小塚は見へ只花と云跡

読終ふつれしとかや　宝篋の此下ニ埋ム　今ハ一石一字に法華経を書写と

一　古ハ氷室　保保ノ庄あり宮村の西ノ竹今至富と云華やノ宮あり二ハ村より出る道ノ後あやまりてまあ瀉と云なるハ寺

播戸の下集

古しへの詠の芝の人去る後清水に袖をぬらしつゝきて旅人

此芝を開山時　勝覚上人

古今小萩枕

一　霧と法とあせの清水清水なる下を見るとさん

一　阿弥陀ヶ岩村　保保ノ庄

一　さくらに新古を清水あらはれあらしくも中将と寺ある旅人

一　中筋村　保保ノ庄　全

此村ノ東二丁斗ニ池ノ有之と云出家有此所に云ふ

や薬師と云小堂有此堂の清水より出る温泉之

泉也清水の銘有今此池より所今能道ニて

年歴ハいつの比とも亡失して知る人も無名

の小堂を草履ると云浄土宗勝覚寺和尚之此

本尊ハ中将操る当相古田中山義字　三本別所　蓋も之人

佛とも云又殊しく温泉湧出村の薬師とも云霊験
あらたかにして諸人参詣し常に参詣不断有之
一生石村　石宝殿山麓ニ有
万葉集ニ生石ノ上人の哥有
往昔聖徳太子此時妹此所にて磐石を以て造りしか殿を
造らんとし里人に啓へぬる杉原紙は押児より出る
云伝ふ　楠戸板原ノ
杉本十九カ
押之　　読人しらす
楠戸板原
友とても神世の昔しとさや高砂押之尾山の名也
一神爪村　加古川ノ一里西往還筋之一里塚有
石ノ宝殿ノ多未アリ
此所住吉日向大明神此神爪ニ而鎮座しと云

一説ニ言伝此神此山ヘ流寄と云伝之村ノ名
とせし此村西ニ有之往還ノ小土塀の下ニ杉木四五
本有之地ニ石村ニ有　用明天皇御腰掛石と云伝ふ故
近民憚る事ある也　證拠なし　不審
一長東村　神谷ノ内
此村ニ古ハしく温泉湧出し事有年を歴して所
務以て泥田地となり小堂有　薬師堂也　今ハ村内
ヘ川池田難渋ニ付公ノ時より此村の文字祝字なり
をとて御年貢納ノ家新ニ石斗ノ御米有しより
古代ゝ田畑の古地として此事急々[illegible]

其ゆ段縁(後)
楊ナトゝ語ルカ
是又大寺(専)の法係事ぞの事なるべし
一大村　今ハ佐古村と同じ村と地続ニ山寺ノ古き寺有此所ニ姫路殿里ノ鋳物師等居て在所ニ住居トニ
村ノ内葉田地ノ下分つる也
ちとも此里ハ昔のこの辺にて住人の檀家も雑し

一日本記ニ云推古天皇御宇當郡飾(印)ヨリ長八尺高
二丈余角ニ七草有甚(其)色五色大鹿出来テ一夜ノ中ニ
作稲二三段食行方尋ル濵出テ海入見ハリ釣人等此

(鹿)庶ヲミ十ノ嶋播州之中ニテ見タリト申ス早彼嶋ハ道ヶ
リ村考位(左)西蔵本九未諸人愁歎相計討殺シ此事
無隠失五色ノ獣ハ帝之衛宝也無左右殺条罪科
依難遁安藝國嚴嶌被流年月経曰天皇御宇元年
癸丑九月十三日天晴海上静ナル時錦綾ヲ以飾ル舩浪上
見来天童形女躰三十三人乗給藏本九崇ハ奉嚴島
大明神是也委細ハ彼縁起譲ル
安藝国嚴嶋ノ明神ハ者市杵島姫也　或説ニ曰娑謁羅龍
王之娘也　推(推古)右天皇ノ時建此社
一米田村　又云伊織ノ云或者有文を云云
元来ニ云伝へ別所辰城の後此米田村に来り住居し

て伊織を生る十二歳の時某を納め迄在りける
て猶こそうさんかの古川迄まで通ひしを流く
ともかく右京の翠東といふ代人の為めに縁り之
の神とおなし引取りとし其の米田村へ通ひ通ひ迄化
人は折りうちて生き徒ひぬ所能迄代迄彼田
かまの家の於ても青山にて右は小笠原右近信
に事申出有るに天下無双の兵衛を召抱へられ
家分まてあり此伊織を家に百石を与へ
りし不か量を以て迄かる其の後勢子を世
に迄後世なり小倉へ召さて出仕し下ら迄りる

此書語の一揆の時も彼戦場へ下りた迄軍
功有りて賞として二千石（五千石とも云）を領の無役まて小笠原
家に仕ふ子後見伊織として家を継ぐなりまた子
孫由かの者米田村今にあり其後伊織氏号
?よりて泊大明神といふ社ありて願紙離舞蒼指摘楽
鹿川まてのよし建立有りける泊りの社なり
剣石境の端に佛寺の宗門人来路彫刻せり剣泊
の古事を米田村へ寄せて建之内にて泊へ八
叢上家の清家仙谷二千枚（名ノ少筆）二本限而被
家臣の子孫小倉より江府御米の代泊へ被遣

使参有之由也
此伊織の母ハ加東郡釜井ノ庄宮ノ脇村ノ人也依之伊織を
久孫宮ノ脇村ニ庄居住せし文才ニ富也清京ニ云有
此人ハ高類すて三十六歌仙の孫寄ニ歌書き清覧
上諸公家ハ自詠自筆にて帝王御製御宸筆一
枚下し給ふりて今釜井庄の氏宮ハ神庫の蔵
め寶物とせし文才ニ大京二云人有此人の石
碑今三木界木霊寺遷ニ在之
是迄々宮長清京と有ハ実ハ又京清京とて加東郡釜井ノ庄宮ノ脇
村ノ庄屋て此伊織共参京ニ住し清ノ庄屋ニ而神主
抱被守役を勤居たりしが今も年ありけり
外ニ数多御座候之以作ニよる今ハ不存

大京や去当ハ後法師ニ住し 楚農典ホニナサル 田延宝頃今
一船頭村大嶽ニ有此境田ニ野狐年を經て住ん
ありし延享五年戊辰の正月子を生す同三月ニ大ニ
祝くりたりし親狐神ハ大の不為ともさりし村中をう
かゞひ居り後ニハ豊かなる人家の内へも入けれは
しきりに人々もかなしみける然も稲荷へ参るとて迄さす
もやし出来ぬる事ども山中へ入しと云ふる此親狐後
ニ大ニ天死しけると気つき乃ニ鷹ニ出り家の為
ニ一丈もありし本を伴ひ出し終りしく五月廿八日にみられる乃
りし此村ニて祭りを候也住居地の小名にて称わし居

国立公文書館
National Archives of Japan

其後猶府を安せんとせし年二州平治し人多く集り来り
に猶せんと諸て吟合しら姫路の役人を呼
依せ新しき年寄を定め何方迄も姫路の事まても
其の後つにかくの如り津る家僕の之あまり一念にて
深く志ゑ御領に新田を新たに開き不存の経営代々聞
れたるしと云もろもろの事かくる士蔵の新葉に
人武士にてと云なし三後村年にのせりもあるまま
古川まりぬ森内の限り雑後ありし家ゑ中して後
覚えを歴代とそり

一 国包村築山 長二十間 横十一間 高并一丈四方石垣也

右築山新地ハ寛文六年丙午二月大坂中ノ嶋長濱屋新六
と云姫路へ訴へ申承代地を買受田地を開き度人
足を以築立枡を止めて加ヘ家ニ此村加古川の川
上にて古来川をたたなり家富浜屋出地切て
何事へもみち通かつて土蔵の一も雑家あり満水沈
其人も其の辺に何ともかる絶家をも根の人と思
いまだ此築山と云て
大守様へ浩郷を申上しさる人御憐愍をなし之とめ
しる道有りしも也三後浩屋敷御後有して今
限る其姫府大守酒井公浩治世孫浩之

此長濱屋利兵衛ハ玉包村之者ニて大坂ニて為
賣住し有富有畢人也

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan